

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年9月号

平成二十五年九月一日発行 第二十三巻第九号 通巻第一六七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



心 棒

高橋将夫

夢の世の言葉遊びの涼しさよ
金魚から見れば人間つまらなし
身の丈に余る麦藁子が抱へ
端居してをりコーヒーはブラックで

白玉や過ぎゆく日々のいとほしく
御仏は泣き顔見せず新樹光
蛇の衣人目を避けて脱いであり
撫子のそばの大樹がじやまなりし
辛抱は心棒であり雲の峰
天牛の髭がまさぐる真の闇
草むしり地肌をなでて終はりけり

槐安集

水野恒彦

夏の蝶直情の翅あらづかひ
川わたるくちなはといふ水の紐
梅雨夕焼かくして齡重ねたる
けふはよく笑ひし茅花流しかな
いつからを晩節といふ冷し瓜

延広禎一

火打ち鑽るや神話の大蛇衣を脱ぐ
命の歎俳句の歎や噴井鳴る
でで虫を透かすや蘭学腑分けの図
天籟に紅を増したる水中花
舌抜かれまいぞ閻王のやるまいぞ



加藤みき

こつくりと葉のいろ深し破れ傘
形代や手足動きて飯うまし
夏の月きらと回転木馬の眼
あめふらしのそこいらの色もらふ夏
長き足に小さき顔や短パンツ

石脇みはる

やはらかく畳を拭きし立夏かな
干瓢を干して日の出を待ちにけり
一八の白をかかげて暮れにけり
おもむろにプロポーズする夏野かな
大阪は橋多き町夏書かな

中島陽華

春雷や産着袱紗を手にしたる
太白の上りし山の伽羅路煮
水呑んで比叡降りぬ夏の虹
茎立の畑一遍の寝言かな
赤べらや彩雲山にかかりける

雨村敏子

喝の字の飛白の掠れ夏のはじめ
摂津より白雨駈けくる気配かな
青墨を磨る時青齒朶の濡るる
炎昼の金の鯨笑うなり
衿元に卯浪寄するや恋みくじ

竹内悦子

一面の天鷲絨茅花流しかな
墓鳴くや松にゆらぎのありにける
水無月の水照つてゐる旦暮かな
あぢさゐに牛の貌あり鬼の顔
先生にだけは聞こえて不如帰

本多俊子

祝(夢)藤
思ひ出の夢いくつあり水中花
梧桐の青きところに触れぬたり
大寺の不動の水に毛虫浮く
遠くきし玫瑰の紅愛うるはしや
夕づつへあめんほう脚のばしきる

近藤喜子

心澄む祝初来「夢」閑けさ夢寐の水中心花
蚊柱の内は炎となつてをり
青き星しかと踏みゆく夏野かな
かきつばた水と水とを結びをり
言霊やあれは恋せし蛭の火

久保東海司

まだ見えてゐる流燈へ手を合はす
鱧の皮上座にあぐら組みて酌む
些事多き幹事に会釈ビール注ぐ
瀬を辿り瀧のようやく耳につく
蚊柱を崩す風止みたそがれて

瀬川公馨

内典も外典も夏のろくろ首
へらず口の犬に食はせる陳さうめん
向日葵やバンジョー弾きを呼びにやる
暫くを団子虫らと遊びけり
ガガンボや南半球かげりたる

中野京子

心髓を虚空に立てる海芋なり
草踏んで裸足で見ゆるこの世かな
玉解きし芭蕉の空や阿修羅像
時流より自流で行かふ蝸牛
鬱ひとつ茅花流しに浮いてゆく

柳川 晋

黒南風の眷族らしき水たまり
ハンカチを二枚持ちたる二心
尺蠖のバックビートを効かせをり
ギヤマンの皿に盛りたる鰐の肉
宝石のたとへば枝の青蛙

近藤 紀子

枇杷の種ころころ金毘羅詣でかな
花莫蔭やよそ行きの母若かりし
半夏生の葉叢に羽音生れにける
なんぢやもんぢやの花が咲きしと伊予訛り
一人行く迷路メロンの網目かな

岩下 芳子

たゆたうてゐるまんぼうの昼寝かな
雨蛙大きな貌をしてをりぬ
十葉のわが世となりぬ裏通り
未央柳雄蕊の数をひけらかす
石垣を舐めに出でたる蝸牛



槐市集

本間 瓦子

ライオンのやうに威を秘めたる牡丹
たつぷりの髪のうねりて海苔干せり
マチユピチュの如き宇治金時と匙
かき氷人と接するより風と
轟きて心臓飾る花火かな

前田 美恵子

夏蝶の砂丘を越える決意かな
青葙や昨夜の騒ぎの跡も無し
鰻の日長蛇の列に加はりし
かはほりの竜になりたきうねりかな
膝の子が眠つてしまふ天瓜粉

松下 八重美

山腹の札所を覆ふ椎の花
竹煮草道を曲れば海現るる
山頂に蜘蛛の囀ひはらひゆく
街角にチエ口奏でぬし七変化
柚子の花紅の灰汁流しけり

柳橋 繁子

藤棚や雨にぬれたる犬臭ふ
音たてぬ鳥揚羽の乱舞かな
ペディキュアの爪の紅籐寝椅子
陵に寄り添ふ小島立葵
天を突く仁王の怒髪半夏かな



槐集

高橋将夫選

一本の糸をたどれば女郎蜘蛛 大阪 江島 照美

いろは歌知らぬ世代の田植歌

夏の月崇りも罰ばちもなきこの世

黒南風や懺せんぼふ法ぽふにみる朱の衣

浮世絵の美人の紅やさくらんぼ

早乙女のさみどりの風植糸ゆけり 枚方 熊川 暁子

ほうたるが出てくれるなら一泊す

梅花藻にこの世の水の透きとほる

喉ごしも嵯峨の水無月豆腐かな

夏つばめ浦の夕日を追ひ越しぬ

明と暗絢ひ交ぜて落つ神の滝 岡崎 寺田すず江

風鈴や彼の世此の世の音幽か

茹玉子二つ作りし麦の秋

ときめきの少しありたり恋蛩

暫くは私の天下アマリリス

梅雨深し闇の中より鈴の音 大阪 有松 洋子

無花果の枝に蛇みて我を見る

息深く吐きつつ蓮のひらきけり

蘭鑄の午睡へさそふ尾鱈かな

死はつねに匂ふなり紫陽花でさへ

東山の滴りたちまち五智水に 京都 竹中 一花

五智の泉掬ふ柄杓や堂明し

観音の道や青羊齒さはさはと

白南風や鶴亀の庭に猫眠る

娘らの乾杯大原紫蘇ビール

夏蝶や無心の我に近づきぬ 岡崎 岩月優美子

不器用に生きし父なり白緋

モナリザに似しひと青桐の下に

唇乾く夜なり守宮の鳴きにける

絵の中の鮎いつまでも貴公子に

銀河往来 高橋将夫

◆「槐集」 観照

いろは歌知らぬ世代の田植歌 江島 照美

少女が田植歌を歌っている。このごろは田植行事などではあまり聞くことのない懐かしい田植歌。そういえばこの少女、いろは歌などきくと知らないのだろうか。いろは歌と田植歌：ノスタルジーを感じさせる一句。

一転してザ／＼本の糸をたどれば女郎蜘蛛は怖い一洵い／＼夏の月崇りも罰もなきこの世は世の本質に迫る。崇りも罰もないけれど、でも、迷信で片付けられない時も。

黒南風や織法にみる朱の衣は黒南風と織法と朱の衣の明暗、色彩の対比が鮮やか。これまた、餓悔の本質に迫っている。浮世絵の美人の紅やさくらんぼは、季語のさくらんぼがつきすぎを越えて効いている。

夏つばめ浦の夕日を追ひ越しぬ 熊川 暁子

浦の夕日をよぎる燕。「夕日を追ひ越しぬ」が作者ならではの表現で、燕のスピードがよく伝わってくる。

早乙女のさみどりの風植糸ゆけり／＼梅花藻にこの世の水の透きとほる／＼喉／＼も嵯峨の水無月豆腐かな…どの句からも作者の豊かな感性がよく伝わってくる。

／＼／＼は出てくられるなら一泊すからは作者の螢を恋う気持がストレートに伝わってくる。

明と暗縋ひ交ぜて落つ神の滝 寺田すず江

闇に月光を編み込むように落下する滝の景を思い浮かべた。陰陽・明暗の宇宙の本質に迫っているよう。

風鈴や彼の世此の世の音幽か…確かに、風鈴の音にはそんな感じがある。／＼／＼は私の天下アマリス／＼は痛快な一句。季語のアマリリスが嫌味を消している。

蘭 蘭 蘭の午睡へさそふ尾鰭かな 有松 洋子

蘭は顔もそうだが、尾鰭も見ていて飽きない。ゆらゆら揺れる尾鰭を見ていると確かに眠くなりそう。

梅雨深し闇の中より鈴の音／＼無花果の枝に蛇めて我を見る／＼死はつねに匂ふなり紫陽花でさへ／＼はいずれも怖い精神の風景。

息深く吐きつつ蓮のひらきけり／＼は蓮の開花の姿を作者ならではの視点でよく捉えている。

東山の滴りたちまち五智水に 竹中 一花

五智とは五種（法界体性智、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智）の知恵。ともかく、京都東山の滴りは霊験あらたかだという。／＼娘らの乾杯大原紫蘇ビールは大原の紫蘇ビールが爽やか。

絵の中の鮎いつまでも貴公子に 岩月優美子

絵の中の鮎はいつまでの新鮮な鮎のままなのだが、鮎を貴公子とみたところが新鮮。

蛇衣を脱ぐ鏡面に闇のあり 前田美恵子

「蛇衣を脱ぐ」と「鏡面の闇」の配合が卓抜。まるで鏡面の闇に衣を脱ぐ蛇の姿を見えるような幻想にかられる。（以下略）